

堂ヶ嶋遺跡

石 貫遺跡

上 妻遺跡

童子丸遺跡

妻北地区下水道敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ

2007

宮崎県西都市教育委員会

序

古く、日向国を中心地であった西都市には多くの文化財が分布しております。これらの貴重な文化財を後世に伝えるのは我々の責務であり、本市では文化財の保護、活用に努めてきていますが、各種の開発事業によって影響を受ける埋蔵文化財・遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

西都市教育委員会では、平成18年度公共下水道事業に伴い、西都市大字三宅、童子丸、右松所在の堂ヶ嶋遺跡、童子丸遺跡、上妻遺跡、石貫遺跡の発掘調査を行いました。本書は、その遺跡調査概要報告書です。

今回の調査では縄文土器破片、石器、弥生時代後期前半の竪穴住居跡や、掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴掘方、土地区画と考えられる溝状遺構、それに伴う古代の土器破片・瓦・漁労具が出土しました。

今回の調査により得られた成果は、西都市の古代を理解するためには極めて重要なものであります。

本報告が学術的な研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた、西都市上下水道課、宮崎県教育庁文化財課、また発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成19年3月20日

西都市教育委員会

教育長 三ヶ尻 茂樹

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が西都市上下水道課下水道係の委託を請け、平成18年度実施した菱北地区に所在する遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、平成18年7月19日から平成19年2月22日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査は、1区の一部、3区、D区、F区を養方政幾、1区、2区、3区の一部、A区、B区、C区、E区を津曲大祐が担当した。
5. 調査及び図面作成は、菱方・津曲が行い発掘調査者全員で補助した。
6. 遺物の実測・拓影は菱方・津曲が行い、遺構・遺物の浄書は菱方・津曲が行つた。
7. 本書の執筆は第Ⅰ、Ⅱ章を津曲が、第Ⅲ章を菱方・津曲が行い、編集は津曲が行つた。
8. 本書に使用した方位は、座標北（G. N.）と磁北（M. N.）である。
9. 本書に使用した標高は、海拔絶対高である。
10. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帳』に準拠した。
11. 調査地点は調査年度・路線名・調査地点番号で記号化した。また、起債事業の路線名は補助事業と区別するためにアルファベットで示した。

目 次

第Ⅰ章 序説		第1節 遺跡の現況要	5
第1節 調査に至る経緯	2	第2節 遺構と遺物縁	7
第2節 調査の体制	2	第IV章 小結	12
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	3	報告書抄録	27
第Ⅲ章 各遺跡の調査	3		

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	Fig. 11 A-3・12-21地点遺構・土層実測図(1/200、1/40)
Fig. 2 調査区位置図1 (1/5,000)	Fig. 12 A-3 12-2-2地点位置図(1/5000)
Fig. 3 調査区位置図2(1/5,000)	Fig. 13 A-3・12地点出土遺物実測図(1/3)
Fig. 4 1-7・11・2-2地点遺構・上層実測図(1/40・1/100)	Fig. 14 B-21～23地点位置図(1/5000)
Fig. 5 1-11地点出土遺物実測図(1/3)	Fig. 15 B-21～23・E-3 地点実測図(1/100)
Fig. 6 1-7・11・2-2地点位置図(1/5000)	Fig. 16 B-22～23・E-3地点土層図(1/100)
Fig. 7 1-16～18地点位置図(1/5000)	Fig. 17 E-3 地点位置図(1/5000)
Fig. 8 1-16～18地点遺構及びFSA1実測図、出土遺物実測図 (1/4-1/40・1/200)	Fig. 18 B-22～23地点出土遺物実測図(1/3)
Fig. 9 3-24～26地点遺構・土層実測図(1/40・1/200)	Fig. 19 D-4地点出土遺物実測図(S=1/4)
Fig. 10 3-24～26地点位置図(1/5000)	

図版目次

P L 1 1. 1-7地点遺構検出状況 2. 1-7地点完掘状況(北) 3. 1-7地点完掘状況(南) 4. 1-7地点溝状遺構土層 5. 1-11地点遺構検出状況 6. 1-11地点完掘状況 7. 2-2地点遺構検出状況 8. 2-2地点完掘状況	P L 2 1. 2-3地点遺構検出状況 2. 2-3地点完掘状況 3. A-12地点完掘状況 4. B-21地点完掘状況 5. B-21地点土坑完掘状況 6. B-22地点完掘状況(南) 7. B-23地点完掘状況(北) 8. B-23地点完掘状況(北) 9. E-3地点溝状遺構	P L 3 1. 3-1-16地点SA検出状況 2. 1-16地点遺物検出状況	3. 1-17地点遺構検出状況 4. 1-18地点遺構検出状況 5. 3-5地点遺構検出状況 6. 3-24地点消失円墳周構掘削前状況 7. 3-24消失円墳周構検出状況 8. 3-26地点消失円墳周溝検出状況 P 1.4 1. 3-27地点遺構検出状況 2. 3-32地点遺構検出状況 3. D-2地点遺構検出状況 4. F-1地点遺構検出状況 5. F-10地点遺物出土状況 6. F-10地点遺構・遺物検出状況 7. F-15地点遺構検出状況 8. F-18地点遺構検出状況
--	---	---	--

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

当地区に所在する遺跡の発掘調査については、妻北下水道敷設事業に伴い実施したものであり、平成16年度事業からの継続事業である。内容は現在、市道、県道として利用されている道路に下水道管を敷設する工事で、工事区域に隣接して西都原古墳群の支群や日向国府跡が所在し、周辺地での埋蔵文化財調査例が多くあるため、事業主である西都市都市計画課(当時)と協議した結果、遺構・遺物が出土した場合の現状保存が困難であると判断し、記録保存を目的とした本調査を実施した。

第2節 調査の体制

事業主体 西都市役所 上下水道課 下水道係

調査主体	教 育 長	三ヶ尻 茂樹
	社会教育課長	伊達 博 敏
	同 補佐	楠瀬 寿彦
	同 係長	義方 政幾
	同 主査	重永 浩樹
	同 主任主事	笠瀬 明宏

調査担当	同 係長	義方 政幾
	同 主事	津曲 大祐

調査指導 日高 正晴 (西都原古墳研究所長)

発掘作業 緒方タケ子、黒木トシ子、児玉征子、篠原時江、関治代、長谷川クミエ
浜田スミ、疋田はる子

整理作業 黒木文子、中原昭美、長谷川明美、吉留尚美
以上、敬称略

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 立地

本調査区は、宮崎県西都市の中心に位置する。現在の西都市街地からは直線距離にして約1kmである。

九州山地から東に伸びる丘陵が一つ瀬川により浸食され流域に沿い沖積平野を形成し、その平野を挟んで洪積世台地が南南東に伸びる。一つ瀬川からみて西側が国特別史跡西都原古墳群の広がる西都原台地である。本調査区は西都原台地の東側から南東に広がる中間台地で、標高は約20mの位置にあり、西都原台地との比高差は約30mである。

このように当地域の地形は九州山地から伸びる丘陵が河川の浸食により形成された平野と八つ手状に伸びる洪積世台地から成り、その台地上や台地縁辺に遺跡が集中するといった特徴がある。

第2節 歴史的環境

西都原台地上を中心に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が所在する。

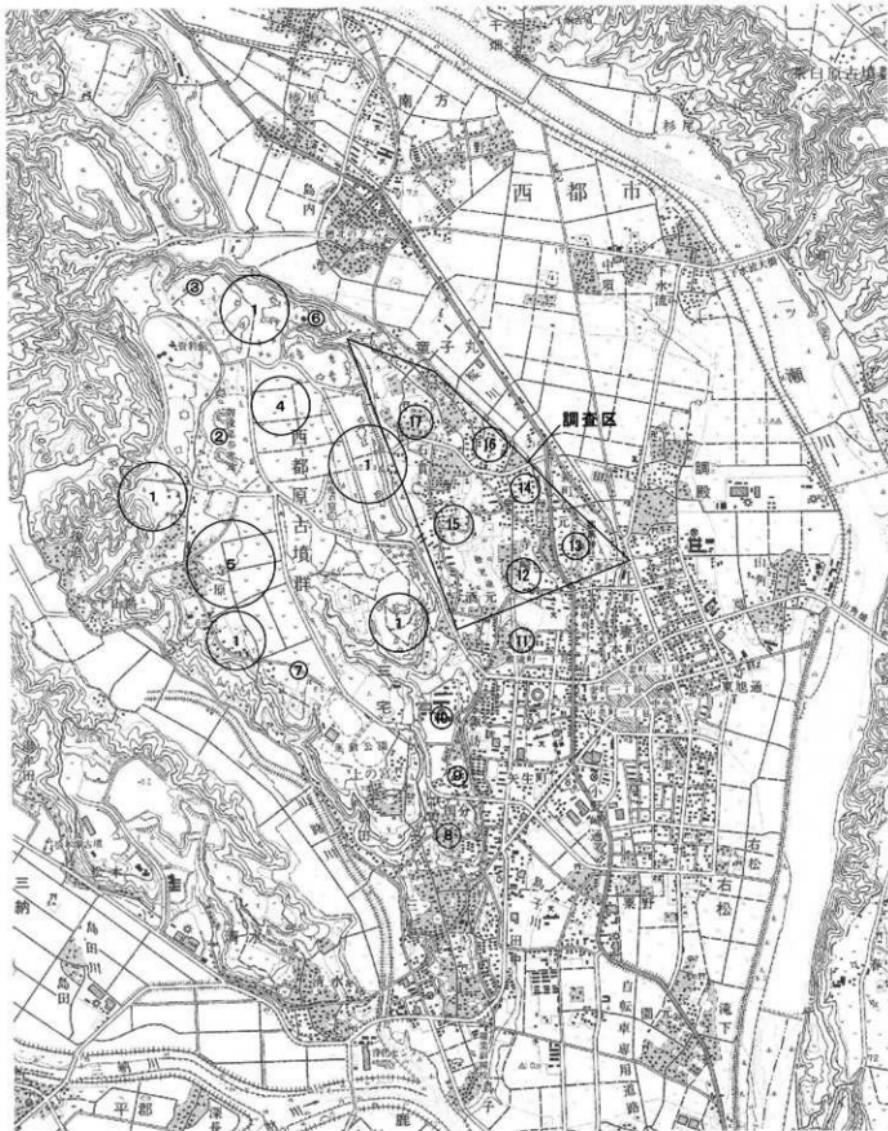
主要な遺跡を概観すると、まず台地上の東西4.0km、南北2.0kmの範囲に広がる国指定特別史跡・西都原古墳群があげられる。古墳時代前期から終末期までの古墳群であり、その構成の通時性とともににおける多様性、良好な遺存状況は稀有の事例であり、宮崎平野部の古墳時代を理解する上で多くの情報を持つものである。

この西都原台地は古墳群により有名であるが、その台地の北西端には縄文時代早期の集石遺構が確認され、台地中央部には縄文時代後・晩期、弥生時代中期～後期前半の住居跡が確認されており、古墳時代以前から当地域の生活遺構が所在する。また台地東北端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落である新立遺跡があり、台地南端部の寺原地区には古墳時代の集落が所在することが予想される。

また、台地の東側から南東側にかけて、約30m下った標高には中間台地が広がっており、遺跡が集中する。その中間台地の北側に位置する守崎地区には日向国府跡、南東側に位置する国分地区には日向国分尼寺跡(推定)、南に日向国分寺跡が所在する。その他、西都原古墳群の支群も点在し、堂ヶ嶋地区、国分地区においては平成12～13年度に地下式横穴墓群も調査された。同地域内である童子丸地区、刎田地区を中心に6～7世紀以降の住居跡も多く確認されることから、当地域は複数時期に渡り墓域や集落として利用されて現在に到る広域の複合遺跡として評価することができよう。前述したように本調査区もこの中間台地であり、今年度の調査の中心は日向国府跡の北西側と西側にあたる地区で堂ヶ嶋遺跡・上妻遺跡・童子丸遺跡・石貫遺跡が該当する。

前年度まで調査で、古墳時代から奈良・平安時代の住居跡・古墳の周溝・溝状遺構などが検出されており、時期の特定が可能なものが多くある。

調査は下水道管埋設部分のみを対象とするため、狭く長いものになり、個々の地点で検出された遺構、遺物の性格を決定づけるに十分でないが、調査地点が広範囲にわたるため、各地区における遺構、遺物出土状況から複合遺跡内をさらに色分けする根拠を得ることができるものと考える。



1. 西都原古墳群 2. 御陵墓（男狹徳塚・女狹徳塚） 3. 丸山遺跡 4. 西都原遺跡
 5. 寺原遺跡 6. 新立遺跡 7. 原口第2遺跡 8. 日向國分寺跡
 9. 日向國分尼寺跡 10. 日向國分尼寺跡 11. 酒元遺跡 12. 寺崎遺跡（日向國衙跡）
 13. 上妻遺跡 14. 法元遺跡 15. 堂ヶ鶴遺跡 16. 童子丸遺跡 17. 石貫遺跡

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)





Fig. 3 平成18年度 調査区位置図 2

第Ⅲ章 各遺跡の調査

第1節 平成18年度調査区の設定と概要

1、調査区の設定

平成18年度の調査区は下水道敷設工事の工区に沿って設定した。一部の工区を慎重工事とした以外は本調査を行った。各調査区の位置関係と調査区番号はFig. 2・3に示した。総延長2605.3m、総調査面積は2331.4m²である。

2、調査の方法

調査は協議の結果、作業の安全性を考慮し、幅0.8m～1m、現地表面から約1mまでの深さを対象にする。調査対象の下水道敷設路線が現在道路であるため、周辺地住民の生活に及ぼす影響を最小限に抑える必要があることから、調査は基本的に1日で完結する形態をとった。そのため、1日に進む延長は1日で調査を終了し、埋め戻しが完了して現況に復旧できる範囲となり、約10mを基本単位として調査に臨むこととなった。しかし、遺構や遺物が集中して複数日調査が必要な場合は鉄板で仮復旧して調査を継続する。逆に後世の削平等で遺構が残っていない地点については復旧が可能な範囲で調査延長を延ばした。

第2節 遺構と遺物

1、1区の調査 (Fig2・3)

A. 遺跡の現況

本調査区は童子丸遺跡と石貫遺跡である。1工区の調査前の現況は、アスファルト舗装された市道274号・279号と274号と交差する付近の291号である。延長415m、面積373.5m²で、掘削前に目に見える遺構は残っていない。

重機で慎重に舗装路盤を剥ぎ、一部深く掘削し基本層序を把握して、遺物等の有無を確認しながら調査を進めた。

B. 遺構と遺物 (Fig4・5・6・7・8)

1-1～2地点：市道279号上で、溝状遺構を検出した。時期は近世にあたる。

1-3～15地点：市道274号上で、3～4地点では性格は不明だが、南側への地形の落ちを確認した。

5地点は現代の擾乱である溝と、土坑を検出した。6地点からアカホヤ火山灰層が良好に残り、遺構密度も上がる。この地点では非常に深い掘方の土坑を検出した。調査範囲外にかけてかかっていたことから全体像は不明である。

7地点から13地点までは特に遺構が集中する。特に多く検出されたピット群の中には、遺物を含むものや、しっかりとした掘方で等間隔に並び掘立柱建物を構成する柱穴と考えられるものもある。溝状遺構と考えられる掘方も検出され、埋土中から遺物を出土するものが多い。11地点のSE1・2からは、平安時代の土師器碗や壺などが出土した。幅は検出面において約70cmで深さは約30cmを測る。7地点や9地点などでも溝状遺構が検出されている。

出土遺物 (Fig5) : 遺物は平安時代～近世に至るまで土師器・須恵器・陶磁器・石器等が出土している。

1～5は1-11地点から出土した遺物である。1は土師器の碗で性格不明の掘方から出土した。口径は復

元で15.2cmを測る。器高が低く、高台がつくタイプであるが高台部分は欠損している。回転ヨコナデで整形される。胎土は精製されたもので赤褐色粒をわずかに含む。色調は10YR7/6明黄褐色を呈す。2・3・4はSE2から出土した。2は土師器壺口径13.4cm、底径7.4cm、器高4.3cmを測る。回転ヨコナデで整形され、底部は回転ヘラ切りで仕上げられる。程度は精良である。3は土師器壺の底部破片で、外側に張る高台が付く。器面は回転ヨコナデで整形され、底径7.5cm、高台径8.6cmを測る。胎土は精良で器面は浅黄橙色を呈す。4は土師器壺の底部破片で、短い高台が付き、高台内側に指頭圧痕がみられる。復元で底径8.0cm、高台径9.5cmを測る。胎土は緻密で褐灰色粒・石英を含む。内面は黒色を呈し、ミガキで仕上げられる。5は須恵器の鉢破片である。焼成は良好で回転ヨコナデで整形され、内面に縦ナデが施される。

1-16・17地点：「石貫神社」の鳥居の南西、市道291号線と274号線が合流する地点である。周辺にはニニギノミコトとコノハナサクヤヒメにまつわる伝承地の「無戸室の跡」や「児湯の池」が所在している。16地点から竪穴住居跡2軒、17地点からその竪穴住居跡の北辺部分を検出した。復元すると方形プランで、カマドを有するタイプのものであるが、2軒が重複していると思われ、不明な点が多い。検出面はアカホヤ火山灰層で、検出面からの深さ0.13mを測るが、かなり浅く、西側ではつきりしない。時期は7世紀前半頃のもと推定される。

出土遺物：遺物は竪穴住居跡から土師器壺等が出土した。1・2はSA1から出土したもので、1は床面に張り付いて、2は一括である。1は口縁部が短く、直口気味に立ち上がった壺で、口径0.22mを測る。調整は全体的に粗く、表面は右下斜め方向及び横方向の工具ナデで仕上げられているが、裏面は風化著しく不明である。胎土は非常に粗く、1~5mm前後の粒子（小石）を多量に含んでいる。2は若干外反した壺の口縁部で、両面横方向の工具ナデで仕上げられ、胎土は細かい。

1-18~23地点：17地点から北に延びる市道274号で、アカホヤ火山灰層は22地点部分で確認できる程度で、全体的な検出面は暗褐色及び褐色ローム層である。調査の結果、溝状遺構1条（21地点）・柱穴11個を検出した。溝状遺構は、現存長3.2m、幅0.4m、検出面からの深さ0.26mを測る。遺物は溝と柱穴から土師器等が出土している。

2、2区の調査 (Fig2-3)

A. 遺跡の現況

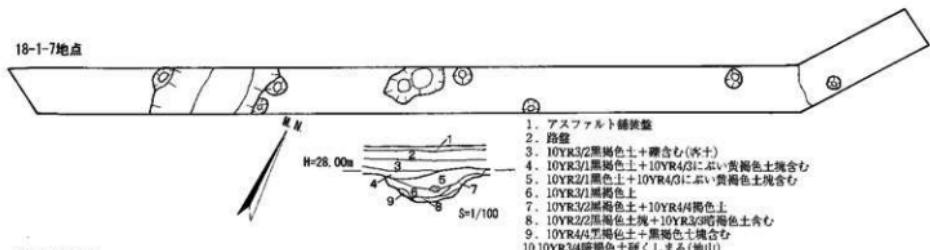
本調査区は童子丸遺跡内である。現況はアスファルト舗装した市道278号である。1区の市道279号から東側に位置する市道で、中間台地の縁に沿って北側に抜ける。地形は北側より次第に傾斜し低くなる。周辺は住宅地と畠地で、道路部分が數十センチ低いことから削平を受けている可能性が高い。昨年度の調査で今年度調査起点の南側を調査したが遺構検出面は現地表面から約30cmで検出され、かなりの削平を受けていた。しかしながら、平安時代の南北を軸に取る溝状遺構などが検出された地点もある。

延長は222mで、調査面積は199.8m²である。

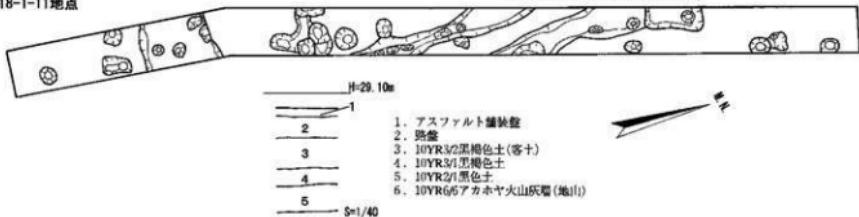
B. 遺構と遺物 (Fig5)

2-1~4地点：調査区の中でも遺構が集中する。1地点で平安時代の溝状遺構と柱穴と考えられる掘方を検出した。2地点から方形の柱穴と考えられる掘方を検出し、径70cm、掘方の深さ約85cmを測る。他にも多くの柱穴の可能性が高いピットを検出した。この付近に掘立柱建物が所在する可能性がある。3地点では、溝状遺構と性格不明の遺構、ピット群、竪穴住居跡の可能性がある掘方を検出した。

18-1-7地点



18-1-11地点



18-1-2地点



Fig. 4 1-7・11・2-2地点遺構・土層実測図

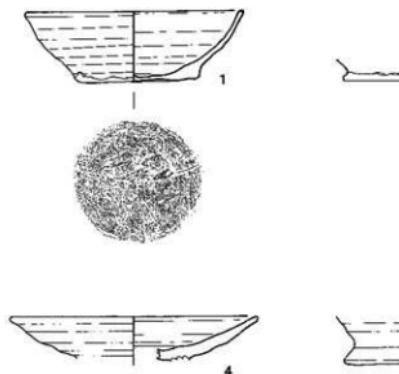


Fig. 5 18-1-11地点出土遺物実測図

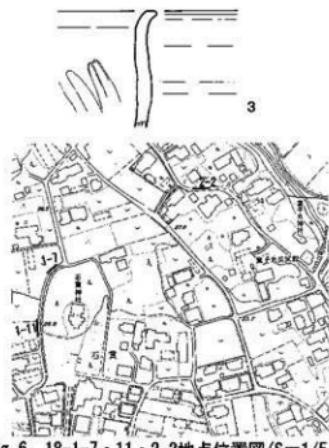
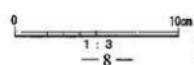




Fig. 7 1-16~17地点位置図 ($S=1/5,000$)

1. アスファルト道路

2. 駐車

3. 防護

4. 堤防

5. 黒色土

6. 白色土

7. 灰白色土

8. 褐色土

9. 黄色土

10. 深褐色土

11. 黑褐色土

12. 黄褐色土

13. 灰褐色土

14. 黑褐色土

15. 黑褐色土

16. 黑褐色土

17. 黑褐色土

18. 黑褐色土

19. 黑褐色土

20. 黑褐色土

21. 黑褐色土

22. 黑褐色土

23. 黑褐色土

24. 黑褐色土

25. 黑褐色土

26. 黑褐色土

27. 黑褐色土

28. 黑褐色土

29. 黑褐色土

30. 黑褐色土

31. 黑褐色土

32. 黑褐色土

33. 黑褐色土

34. 黑褐色土

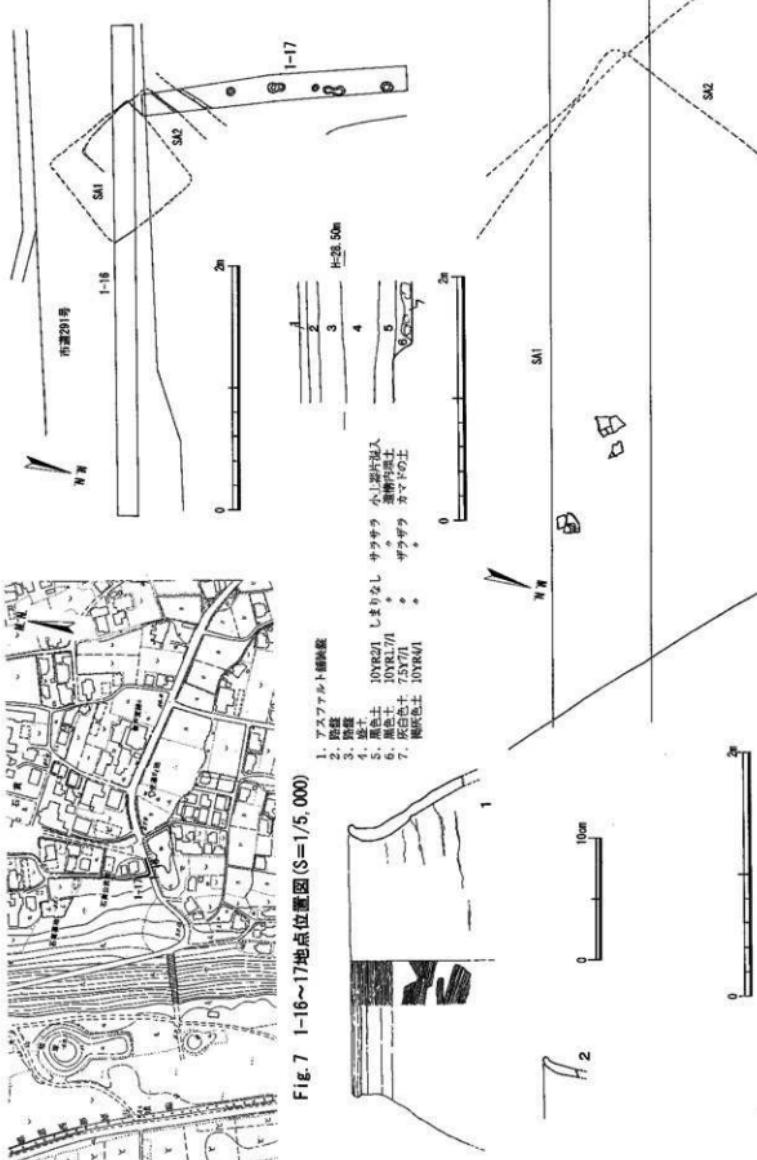


Fig. 8 1-16~18地点遺構分布図及びSA1実測図・出土遺物実測図 ($S=1/200, 1/40, 1/4$)

4地点においてはピットと性格不明の掘方を検出した。いずれも遺構検出面は現地表面から約40cmの深さで検出しておりアカホヤ火山灰層は残っていない。出土遺物は少ない。

2-5~9地点: 5~8地点にかけて地形が上がり、急に遺構密度が減る。検出面は現地表面から20~30cmの深さになり、ほとんど遺構が検出されない。削平されたものか。9地点になり、溝状遺構が検出された。幅1.2m、深さ30cmを測る。

2-10~12地点: 再び、遺構密度が高くなる。10地点では土坑や性格不明の遺構が検出された。堅穴住居跡と考えられる掘方もある。深さは浅く、検出面より10~20cmである。11地点では、ピット群、12地点では性格不明の掘方と堅穴住居跡と考えられる掘方を検出した。

3、3区の調査 (Fig2-3)

A. 遺跡の現況

本調査区は、堂ヶ嶋遺跡内である。稚児ヶ池西側に位置した狭幅の市道364号（1~8地点）と稚児ヶ池住宅5号棟の西側から直線的に北に延びた市道294号（12~40地点）である。なお、昨年度5区として、市道364号の一部分を調査した。延長466.5mで、調査面積420m²である。

また、この市道364号の北側の東西に延びる道路部分は試掘調査を事前に行なっているが、全体的にかなり掘削されており、アカホヤ火山灰層が遺存しているところのみ本調査を実施した。

B. 遺構と遺物 (Fig9・10)

3-1~4地点: 現在の地形は平坦であるが、アスファルトの下は盛土され、さらに、その下は砂質で礫を含んだ層になっており、全体的にかなり削平を受けていた。標高は約26.6mである。遺構・遺物等は確認することはできなかった。

3-5・6地点: 昨年度5区の1・2地点部分で、道路中央部に水管が通っており、下水道工事に合わせて調査することとなったところである。調査の結果、溝状遺構1条を検出した。溝状遺構は、現存長4.00m、幅0.70m、検出面からの深さ0.22mを測る。遺物は土師器・陶器等が少量出土している。

3-7・8地点: 試掘調査でアカホヤ火山灰層が確認されたところの本調査で、地形的には西から東への下り傾斜で、その比高差2.18mを測る。調査の結果、溝状遺構を2条検出した。いずれも東西に延びているもので、SE1は、現存長13.00m・幅不明・検出面からの深さ0.24m、SE2は、現存長13.50m・幅不明・検出面からの深さ0.10mを測る。遺物は土師器・須恵器・陶器等が出土している。時期的には遺物及び埋土の状態から近世のものと思われる。

3-12~16地点: 12地点は道路敷設時に削平を受けており、文化層はなかった。13地点と14地点で埋まった時期が近世と考えられる溝状遺構を検出した。幅は0.7~1m、深さは検出面から約10cmである。15地点では地形が東側に傾斜し落ちているのを確認した。16地点からは、地形が上がり、溝状遺構や、ピット群を確認した。一部、柱穴と考えられるものがあり、掘立柱建物が所在する可能性がある。

3-17~23地点: 稚児ヶ池住宅5号棟から市道299号が合流する地点までで、地形的には緩やかな登り傾斜で、16地点で標高26.36m、22地点で27.23m、最終地点の40地点では27.47mである。調査の結果、堅穴住居跡・溝状遺構・柱穴等を検出した。堅穴住居跡は18地点で検出したが、北辺のみで、遺物も全く出土していないことから時期的なことは判断がつかない。検出面からの深さ0.17mを測る。溝状遺構は19地点・23地点で検出した。特に23地点の溝状遺構は幅約5.00m、深さ1.28mと深く、小さな谷状の地形となっている。

3-24~26地点：平成13年度の区画整理事業に伴う確認調査（42地点）で消失円墳の周溝を確認したところの東側で、今回の調査でもその消失円墳の北側（26地点）及び南側（24地点）周溝を検出することができた。この調査成果を基に復元すると、墳丘径12.50m、周溝を含めると約16.70mの円墳となる。周溝幅2.20m、深さ0.49mを測る。遺物は全く出土していないが、平成13年度の調査で、周溝から土師器甕1点と数点の土師器片が出土しており、これらから堂ヶ嶋第2遺跡の年代と同時期（古墳時代終末期）に比定されている。

3-27~31地点：27・28地点はアカホヤ火山灰層が検出面であったが、29地点～31地点は谷状になっているようでかなり深く、1.10m以上掘削しても検出面を確認できなかった。遺構・遺物は確認できなかった。

3-32~38地点：32地点ではアカホヤ火山灰層は確認できたが、33～38地点では確認できなかった。全体的に褐色土が検出面であり、かなり削平を受けているようである。調査の結果、不正形遺構・柱穴等を検出した。

3-39・40地点：本地点では1.20m以上掘削しても多量の山砂利を含んだ黄色褐色土であり、かなり埋め立てられているようである。地元の方々の話では、以前は水田だったようで、それを埋め立てたということである。遺構・遺物は確認できなかった。

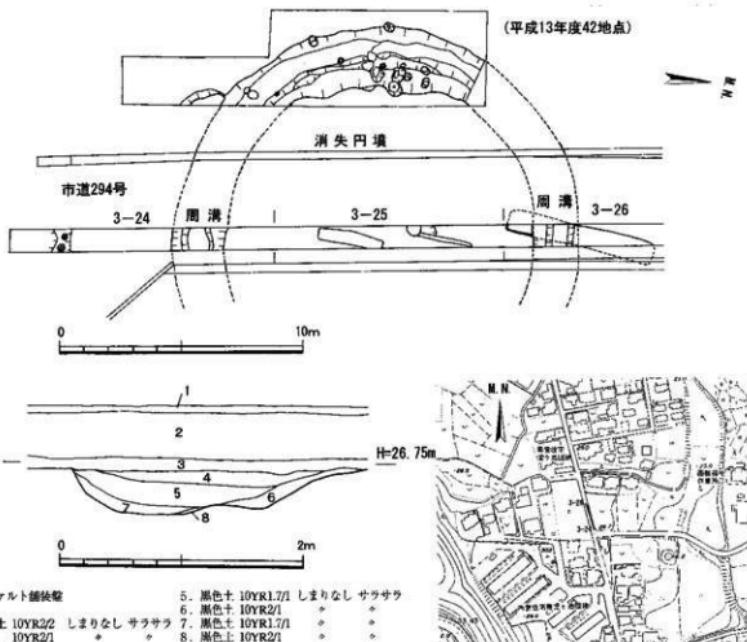


Fig. 9 3-24~26地点造構分布図・土層図 (S=1/200, 1/400)

Fig. 10 3-24~26地点位置図 (S=1/5,000)

4. A区の調査 (Fig2・3)

A. 遺跡の現況

本調査区は童子丸遺跡である。現状はアスファルト舗装された市道279・280・284・285号で、複数の路線にあたる。中間台地縁辺を通る路線から、本年度調査1区と2区の間にあたる市道279号とその支線が中心となる。周辺は住宅地と畠地である。延長533m、調査面積479.7m²を測る。

B. 遺構と遺物 (Fig11, 12, 13)

A-1地点: 1地点では溝状遺構が検出された。北側から東に向かうもので、幅1.6m、深さ0.6mのしつかりした掘方である。台地端部に向かうもので、周辺の遺構との関係など注意したい。

埋土中から陶磁器破片が出土した。

A-2～3地点: 2地点では地形が削平されており、遺構はなかった。3地点では17年度の調査で堅穴住居跡など多くの遺構を検出した市道283号との交差地点で、堅穴住居跡の可能性がある掘方を検出した。二次加熱を受けた甕が出土した。器形・胎土・器面調整法など在地の甕と異なり、搬入品の可能性が高い。掘方の深さは約30cmである。

A-4～6地点: 市道280号で削平により、遺構は残っていない。約80mの延長である。6地点の終点で市道279号に交差する地点では地山が確認できる。

A-7～11地点: 市道279号で、A-6地点から左折した約73mである。A-7地点で堅穴住居跡と考えられる遺構を検出した。遺構面が深く、現地表面から約1mの地点で検出できる。掘方は深さ約10cmと浅い。A-8～9地点にかけては性格不明の遺構と堅穴住居跡の可能性がある掘方を確認した。堅穴住居と考えられる掘方の深さは約30cmで、土器破片などを出土する。

A-10地点では溝状遺構を検出した。幅約80cm、深さ約20cmである。

A-12～29地点: A-6地点との交差点から右折し、北に向かう。12地点は堅穴住居の可能性のある焼土と土師器を含む掘方をはじめ、埋土に須恵器が混入する柱穴と考えられるピット、溝状遺構などを検出し、遺構密度が高くなる。遺構は現地表面から約80cmで検出できる。特にS P5からは須恵器碗の蓋が出土した。径約40cm、深さ約50cmを測る。

13～14・16地点では同じくピット群や溝状遺構が確認でき、遺構検出面の深さも約80cmである。

17地点で幅2.3m、深さ約60cmの溝と考えられる掘方と性格不明の掘方を検出してから以降の調査地点では、遺構を検出できるのは現地表面から約1～1.2mとなり、地形が下がる。遺物は須恵器破片や土師器破片を中心に多く出土するが、遺構の性格はつかみにくい。18～20地点では性格不明の掘方やピット群を検出でき、21～22地点にかけてはピット群の中に掘立柱建物の可能性のある遺構や堅穴住居跡と考えられる掘方を検出することができ遺構密度は高い。

23～25地点にかけては路線に沿って溝状遺構が検出された。幅約1.2m、深さ約20cmをはかり調査地点に渡って検出された。

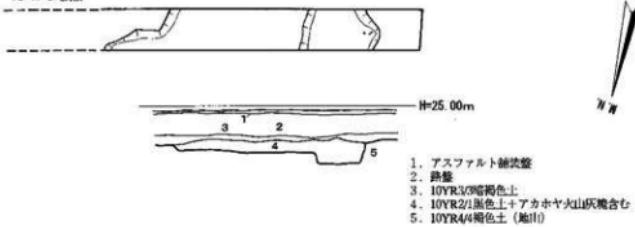
26～27地点は性格不明の掘方と、ピット群が検出できる。遺構検出面は現地表面から約1.2mを測る。

28～29地点では調査地点にわたって、性格不明の掘方と径約90cm、深さ約10cmの土坑が並ぶ。性格は不明である。そのほか溝状遺構と考えられる掘方とピットが検出された。

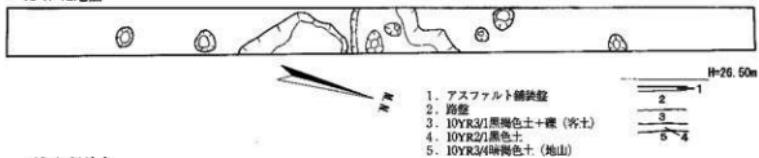
A-30～32地点: 29地点を右折して市道279号と交差した市道274号である。約52mである。

29地点から右折し、東に向かって急に地形が上がり、市道278号と交差するまでには遺構検出面は現地表面から約40cmである。遺構としては土坑やピット、溝状遺構が検出されたが、密度は低い。

18-A-3地点



18-A-12地点



18-A-21地点

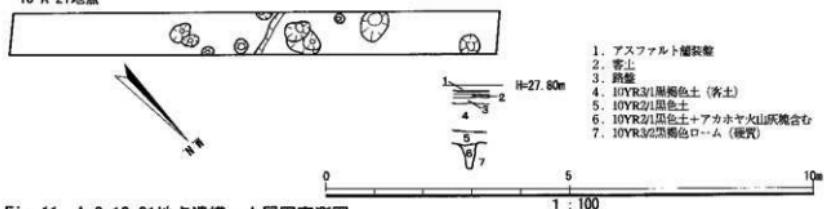


Fig. 11 18-A-3-12-21地点遺構・土層図実測図

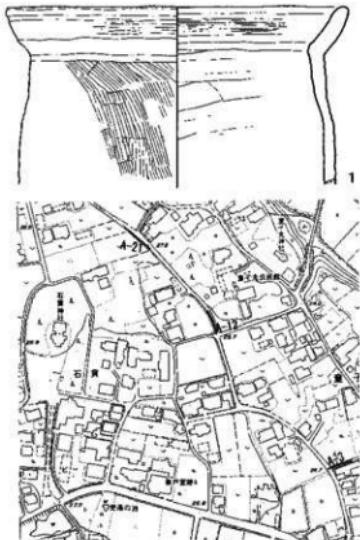


Fig. 12 18-A-3-12-22地点位置図 (S=1/5,000)

— 13 —

Fig. 13 18-A-3-12地点遺物実測図



市道279号から市道278号に向かい、すなわち中間台地縁辺に向かって地形が高くなっていることが確認できた。

A-33～34地点：市道278号から東側に入る袋小路で、性格不明の掘方と東側に向かい落ちる溝状遺構と考えられる掘方が検出できた。34地点から33地点で約80cmも掘方底面が台地端部に向かい低くなっている。排水などの溝である可能性がある。

A-35～36地点：市道278号と279号の間にに入る枝線で、非常に狭い調査地点である。溝状遺構と考えられる掘方とピットを検出した。

A-30～32地点と同じく、遺構検出面の深さから、東側の台地端部に向かって地形が上がっていることが確認された。35地点の調査始点と36地点の調査終点では現地表面から地山である遺構検出面までの深さが約50cm高くなる。

出土遺物：1はA-3地点S A1から出土した土師器の甕である。口径21cm、頸部径18cmを測る。胸部に粗いタテハケが施される。胎土は緻密で粗く、白砂・長石を多く含む。2～5はA-12地点で出土した。2はA-12地点の炉跡と考えられる焼土を含む堀方周辺で出土した、土師器の大型鉢破片である。口縁部が外反するもので、底部の形態は分からない。口径28.6cmを測る。胎土は精良な粘土をベースで粗粒である。褐色・褐灰色粒が多く、わずかに石英・長石が含まれる。外面は摩滅が著しいが、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。3は須恵器壺蓋である。柱穴と考えられるピットから出土した。口径13.8cm、器高3.4cm、つまみ部径3.0cmを測る。つまみは扁平な形を呈し、器面には重ね焼きの痕跡が溶着している。4は須恵器の高环脚部と考えられる。5は土師器腕の底部破片で、外側に張る高台が付く。底径6.8cm、高台径8.0cmを測る。胎土は精良な粘土をベースに褐色粒・雲母をわずかに含む。

5、B区の調査 (Fig2・3)

A、遺跡の現況

調査区は石貫遺跡になる。童子丸遺跡の西側にあたり、市道279号を境に区画される。A区よりも西都原台地側になり、標高も高い。現地形の削平も予想されたが、1区の調査により、アカホヤ火山灰層など良好に地山と遺構が残ることが確認できた。調査地点は支線が主体で、複数の路線になる。延長483m、調査面積434.7m²である。

B、遺構と遺物 (Fig15・16・17・18)

B-1～3地点：市道283号上で、現道路敷設に伴い削平を受けており、遺構が残る層は存在しない。

数箇所で土層図を作成した。3地点に至ると地形も比較的よく残っている。

B-4～5地点：市道280号上で、A-6地点から西へ上る坂である。調査区の中央に排水管と水道管が敷設されており、地形も削平を受けており、路盤を剥ぐとすぐに地山に至る。ピットと性格不明の掘方が検出されたことから周辺には遺構が存在する可能性が高い。

また、市道279号より地形は高くなってしまっており、削平は受けていても文化層を残していることが分かった。

B-6地点：1区で調査した市道274号から民家へ入る袋小路である。延長約15mで、溝状遺構と性格不明の掘方、上坑、ピットを検出した。溝状遺構は、近世の遺構である。

B-7～8地点: この調査区も市道274号から西都原台地に向かい入り込む袋小路で、奥に水路が流れている。そのため、7地点は湿地であったと考えられ、下層には黒色泥層が堆積し湧水する。

8地点にかけて次第に地形が上がり、アカホヤ火山灰層が残存する。上層に過去水田として使用されていた面があり、その下に遺構面が検出できる。ピット群と溝状遺構が検出できた。

B-9～12地点: 石貫神社の参道に続く道路である。現地表面から約1mでアカホヤ火山灰層に至る。

ここで遺構を検出できた。9～11地点では良好にアカホヤ火山灰層が残り、ピット群が検出できた。10地点で住居跡の掘方かと思われる遺構を検出したが、掘削は浅く、性格は判断しかねる。

12地点では地山は残っておらず、黒色泥層が深く堆積しており、湿地であったものだろう。

B-13～23地点: 市道280号から282号に渡る調査区で、B区の中でも最も遺構密度が高い。

13～14地点では遺構検出面は浅く、現地表面から約40cmである。柱穴を含むと考えられるピット群と土坑、溝状遺構を確認した。擾乱も多く、遺構の性格は特定できない。

15～17地点からは遺構検出面が深くなり、現地表面から約70cmである。「メゾン横山」というアパートの駐車場横で、遺構密度も高く、竪穴住居跡と考えられる掘方や、ピット、溝状遺構が検出された。時期は複数にわたるものと考えられ、溝状遺構と判断した掘方は近世のものである。幅は不明で、深さ20～30cmを測る。

18～19地点にかけて検出された溝状遺構は検出面において幅約60cm、深さ20cmを測り、蛇行しながら19地点で調査地点から逸れる。現道の路盤を剥ぐとすぐに検出面に至ることから、かなり削平を受けており、検出された遺構もかなり下部を検出しているものと考えられる。19地点では溝に切られる形で土坑を検出している。溝からは須恵器破片などがわずかに出土した。

20地点では検出時に路盤を剥ぐ際、路盤直下に土器が出上した。おそらくなんらかの遺構を道路敷設時に削平しているのであろうが、曉でも掘方の確認は難しかった。出土した土器は弥生土器で、弥生時代後期前半にあたる。そのほか、ピット群と土坑を検出した。

21～23地点にかけて、非常に遺構密度が高い。ピット群と土坑、溝状遺構、竪穴住居跡などが検出された。22地点から23地点にかけて検出された掘方は竪穴住居跡と推測され、貼り床が施される。幅約4m、深さ20cmを測る。弥生時代後期前半にあたる。溝やピットには平安時代のものがあるが、その中に弥生時代の遺構が検出された点は注目できる。遺構検出面は浅く、約20cmである。

B-24～28地点: この調査区は市道282号上で、約95mを測る。遺構検出面は現地表面から約70cmで、溝状遺構を検出した。幅はやや変化するが、約0.6～1mである。深さ約20cmである。

25地点から統一して検出されている。出土遺物は少ないが、近世の陶磁器が出土した。

出土遺物: B区で注目される出土遺物は弥生時代の土器である。1～2・4・5はB-21地点で出土した在地系甕の口縁～胸部の破片である。口径25.6cm、頸部径23.6cmを測る。口縁は「く」の字に屈曲し、頸部下に刻目突帯を付す。突帯下には刻目を施した際に付いた調整痕が残る。外面は単位のあるタテナデ、内面はハケで仕上げられる。胎土は緻密でやや粗い砂粒や褐色粒、石英、長石、雲母を含む。4はSC1から出土した甕の底部破片で、底径6.6cmを測る。5はSP12から出土した甕の底部破片で、底径5.8cmを測る。

3と6はB-22～23地点にかけて検出したSA1から出土したもので、3は甕の口縁部破片で、口径23.2cm、頸部径21.2cmを測る。外面には炭化物が付着し、タテハケが施される。内面もハケで仕上げら

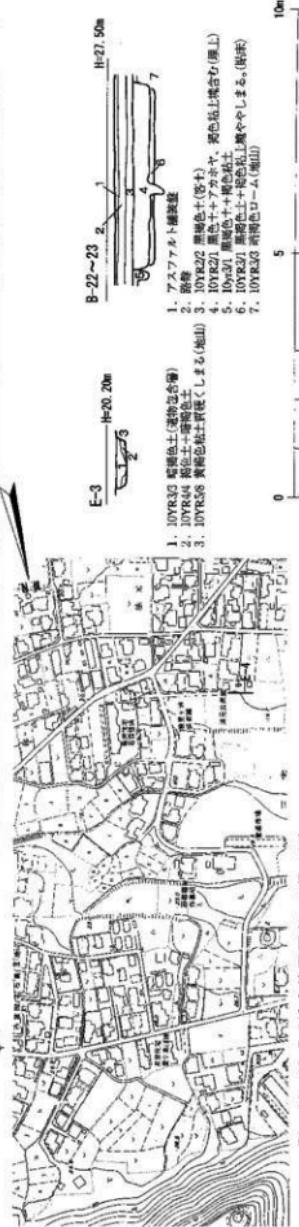
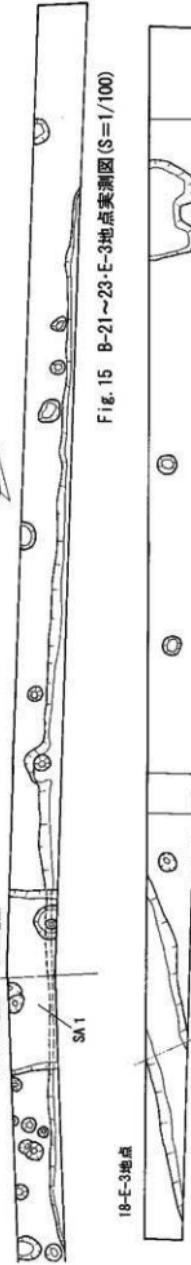
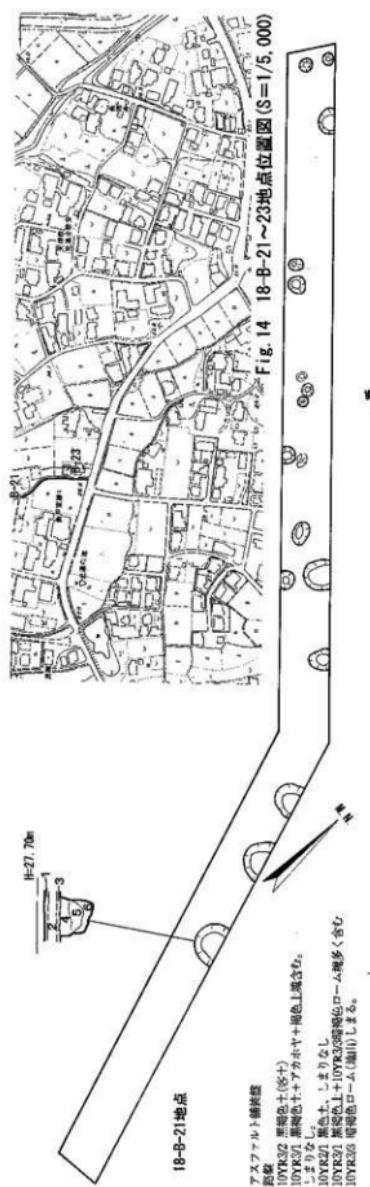


Fig. 17 18-B-22~23SA-E-3地点SE 1 土層図

れる。胎土は緻密で褐色粒・褐灰色粒を多く含む。6は壺か甕の底部破片と考えられ、底径8.0cmを測る。厚手の底部で大型の壺であろう。

6、C区の調査 (Fig2-3)

A、遺跡の現況

本調査区は堂ヶ嶋遺跡である。市道294号から西都原256号墳に上る道で非常に狭く、調査は困難を極めたが、古墳の横を通る線であることから、周溝の有無を考えながら調査を行った。調査区の延長43.5m、調査面積26.1m²である。

B、遺構と遺物

C-1～6地点：1～2地点は西都原古墳群256号墳に隣接し、周溝の存在が予想された。1～2地点にかけて掘方があり、2地点で地山の立ち上がりを検出したが、その掘方内から出土する遺物は平安時代のもので、古墳時代に遡る遺物は出土しない。1地点では深さ約80cmで地山に到達し、2地点で確認した地山の立ち上がりは深さ約30cmを測る。

3地点でも溝状遺構を確認した。幅1.2m、深さ70cmを測る。

4～6地点では削平により、遺構は検出されなかった。

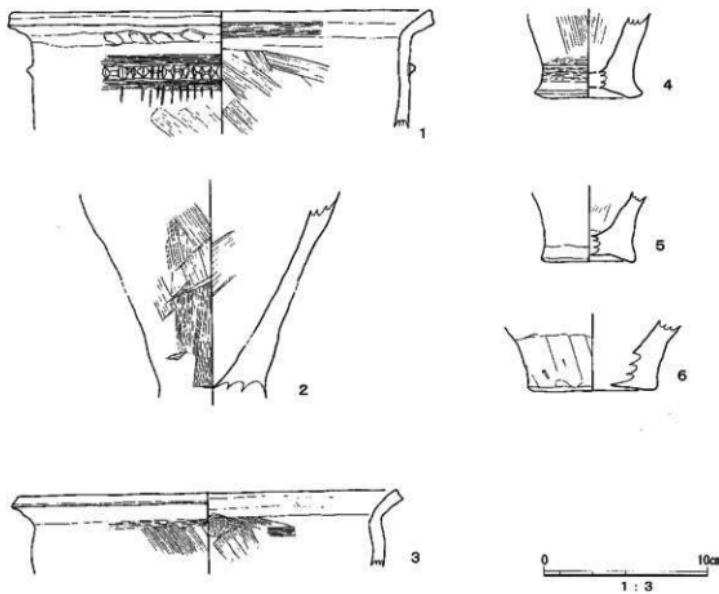


Fig. 18 18-B-22～23地点出土遺物実測図 (S=1/3)

7、D区の調査 (Fig2-3)

A. 遺跡の現状

調査区は上妻遺跡内で、式内社である都萬神社の北側に位置している。また、昨年度6区として調査した地点の続きである。国道219号の東側で、市道310号である。地形的には東から西へ上り傾斜になっている。東側の標高は約17.5mである。調査区の延長は104.0mで、調査面積は93.6m²である。

B. 遺構と遺物 (Fig19)

D-1~4地点：1・2地点はかなり疊を含む土で盛土されており、その深さは1.20mを測る。その下は褐色ローム層で、一部分アカホヤ火山灰層が遺存していた。遺構としては柱穴らしきものを1個検出したのみである。3・4地点もかなり盛土が厚いが、土器や瓦片を含んだ包含層が確認できる。しかし、その下は疊層及び明黄褐色土となっており、削平された上に盛土されたことが窺える。

出土遺物：遺物は土師器・須恵器・磁器・陶器・古瓦片等が出土している。特に古瓦は4地点に集中している。凸面の叩きには格子目叩きと縄目叩きがあるが、圧倒的に格子目叩きが多い。格子目叩きも正格子目叩きと斜格子目叩きがあり、さらに、その格子目が大きいものと小さいものに細分される。1・2は凸面が正格子目叩きの平瓦で、凹面はタテ及びナナメ方向の叩き板によるナデ調整が施されている。3・4は凸面が斜格子目叩きの平瓦で、凹面は3がヨコ方向の叩き板によるナデ調整で布目を残し、4はタテ方向の叩き板によるナデ調整が施されている。5は土師器壺で、糸切り底である。両面回転ヨコナデ調整が施されている。

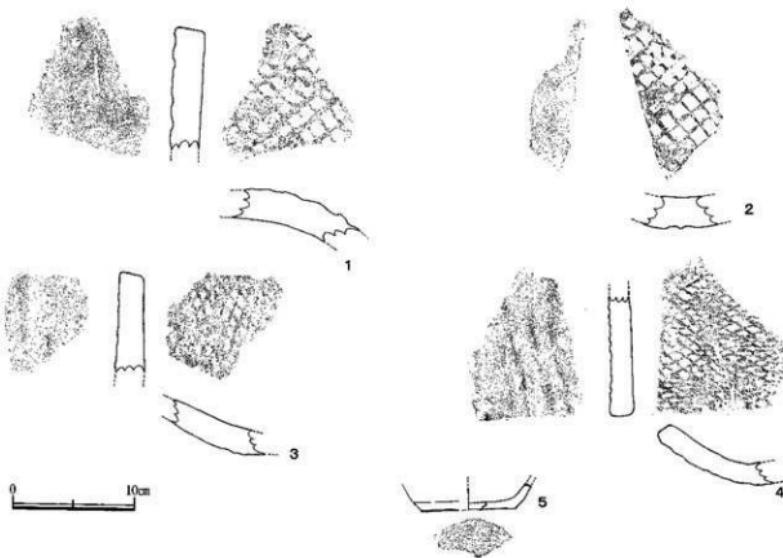


Fig. 19 D-4地点出土遺物実測図 (s=1/4)

8、E区の調査(Fig2-3)

A. 遺跡の現状

本調査区は堂ヶ島遺跡である。法元公民館より、南に公園内を掘削した。周辺には堅穴住居跡や溝状遺構が確認された地点や西都原古墳群の支群などが多くある。調査区の延長は61.7mで、調査面積は55.1m²である。

B. 遺構と遺物 (Fig15・16)

E-1～4地点：現在、グランドゴルフ場として使用されている市有地で、掘削は易かった。

遺構は現地表面から約40cmで検出される。2地点では、溝状遺構を検出し、幅1.2m、深さ30cmを測る。他に、ピットと近世の土坑を確認した。

3～4地点では南北に軸を取る溝状遺構を2条確認し、他にピット、土坑を検出した。特に3地点で検出した溝状遺構は幅1m、深さ20cmを測り、削平状況を考えるとかなりしっかりした掘方である。溝状遺構埋土内からの出土遺物は土師器碗の破片や瓦の破片が含まれることから平安時代で、日向国府跡と併行する時期である。

9、F区の調査(Fig2-3)

A. 遺跡の現状

調査区は、童子丸遺跡の最北部である。市道278号と279号、そして、袋小路となった私道を含み、延長276.6m、調査面積は248.9m²である。

B. 遺構と遺物

F-1～7地点：市道279号で、地形的には、南から北へのわずかな下り傾斜で、最終の8地点では急傾斜となっている。調査の結果、柱穴・土坑等がわずかに検出されているのみで、遺物も土師器・須恵器・磁器等が少量に出土した。

F-8～11地点：7地点から北東に延びた袋小路の私道で、地形的には、上り傾斜から平坦になっている。平坦部の標高は約29.9mである。調査の結果、アカホヤ火山灰層面で柱穴・土坑・溝状遺構、アカホヤ火山灰下層から焼跡を検出した。焼跡は幾つかの箇所に集中しており、周辺には集石遺構が遺存している可能性が高い。時期的には縄文時代早期のものである。共伴して遺物は出土していない。溝状遺構は現存長9.3m、幅約1.10m、深さ0.42mを測り、溝内より土師器・精塙土器等が出土した。柱穴はすべて円形である。土坑は、はっきりしないが方形プランと思われる。いずれも共伴遺物に乏しく時期的なことは不明である。

F-12～19地点：市道279号の東側に並行して走っている市道278号で、地形的には全体的に平坦である。標高約28.4mである。調査の結果、溝状遺構・柱穴・土坑等を検出した。溝状遺構は南北に延びており、全地点で確認できた。遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・古瓦・打製石斧・石錐等バラエティーに富んだものが出土した。中でも、縄文土器は、早期の貝殻条痕文系土器や晚期の深鉢等が出土している。また、古瓦は1点のみであるが、凸面斜格子目の叩きである。打製石斧や石錐等石器が多いのも特色である。いずれにしても、古い段階から本地点周辺は生活の場として使用されていたことが判明した。

第IV章 小 結

今年度の調査では、中間台地における地形の起伏が非常に激しく、複雑であることが分かった。特に西都原台地の麓よりの1区から東側の台地縁辺に沿って併行する2区、1区と2区の間を併行して通るA・B区を調査したことで、各地点での地山の起伏を把握できた。

1区からB区にかけて地形は上がり、A区にかけて下る。A区での遺構検出面は現地表面から約1.2mと最も深い。それが台地縁辺の2区にかけて再び地形が上がる。2区における遺構(地山)検出面は現地表面から30~40cmである。現在、削平や造成でその起伏は捉え難いが、遺構の分布や性格を考える際の留意点となる。

1区:調査区は石貫遺跡内で、最も西都原台地の麓になる。出土遺物から推定できる年代としては古墳時代後期・平安時代・近世(18世紀後半)のものを検出した。1地点~5地点までは近世の溝や現代の搅乱が多かったが、7地点からは13地点までは遺構密度が高く、鍵層であるアカホヤ火山灰層が地山としてしっかりと残存していた。現地表面から約80~90cmでアカホヤ火山灰層に至る。

時期を推定できる遺構は、ピット群や溝状遺構が主体であり、出土遺物は9世紀後半~末のもの、18世紀後半の陶磁器などである。12地点では堅穴住居跡と推測される掘方を検出したが、搅乱により正確な規模は分からず、出土遺物からも時期を特定できない。15地点からは湿地帯か湧水点が付近にあるものと推測され、路盤の下は厚い黒色泥層が堆積していた。

成果としては旧地形の残存状況が比較的良好である点と平安時代の遺構がこの付近まで広がっていることが分かった点が挙げられる。

2区:調査区は中間台地の東端にあたり、童子丸遺跡内である。前年度の調査で、この路線は旧地形が高い標高であったことから現在は削平を受けていることが分かっていたが、今年度の調査でも現地表面から約30~40cmで地山にあたり、アカホヤ火山灰層が残存せず、その下層に堆積する褐色粘土層で遺構を検出していることから、検出された遺構は上半削平されたものであろう。

その中で注目されるのは、2-1地点の溝状遺構と2-2地点で検出される方形の柱穴掘方と考えられる遺構である。2-2地点では他にも柱穴の可能性が高いピットが検出されており、周辺に掘立柱建物が所在する可能性がある。溝状遺構も17-2-35地点で検出した、南北方向に掘られた平安時代の溝の延長であると考えられ注目できる。

A区:調査区は童子丸遺跡内で、調査1区と2区の間を通る市道279号とその枝線になる。出土遺物から、古墳時代~近世まで確認できるが、性格不明の掘方が多く遺構の性格を特定しにくかった。

A-3地点で検出した堅穴住居跡から出土した土師器・甕は8世紀後半、A-12地点で8世紀前葉の須恵器を伴う柱穴と考えられるピットなど奈良時代の遺構も散見できる。

また、A-17地点から地形が下がり始め、遺構検出面は現地表面から1.2mを測るようになる。遺物の出土量も多く、堅穴住居跡の可能性がある掘方が数基ある。

また、東側の2区と比べてもかなり地形が下がっていることが分かる。

B区:調査区は石貫遺跡内で、1区の枝線と南側にあたる地区である。ここで注目できるのは、中間台地において、弥生時代の遺構とそれに伴う遺物が出土したことである。

1区の南東側に位置するB-21地点~23地点では地形が上がり、アカホヤ火山灰層は削平されており、その下層の褐色粘土層で遺構を検出している。路盤直下から弥生土器破片が出土し、B-22~23地点で

は堅穴住居跡と考えられる遺構や土坑から弥生土器の在地系壺破片が出土する。時期は弥生後期前半にあたる。

E区：調査区は堂ヶ嶋遺跡にあたる。法元公民館から南に公園内を調査した。平安時代の溝状遺構と近世の土坑を検出した。地形がすでにかなり削平されていたことから掘方の深さは全体的に浅い。溝状遺構は南北に向き、土師器碗の破片や瓦の破片も埋土中に含まれ9世紀末のものと推測される。

E-4地点の北にあたる17-B-6地点で、古墳の周溝と考えられる遺構が検出されていたことから、それに対応する周溝がこの調査区で検出されると予想されたが、大型の溝状遺構はない。

可能性としてはE-2地点で検出された溝になるが、幅や掘方が小さく、昨年度調査で確認された溝と対応しない。削平を考慮し、この溝を前年度調査の周溝状遺構と対応するとしたら間が約50m以上になり、かなり大型の古墳になるが、現段階では断定できない。

(文責 津曲)

1-17・18地点：17・18地点から検出した堅穴住居跡は、カマドを有するタイプのものと思われるが、昨年度I区とした伝承地の「無戸室の跡」や「児湯の池」周辺でも同タイプのものを検出しており、同時期にはかなり広範囲に集落が存在していたものと想定される。

3区：3区の調査で特に注目されるのは、24・25地点から検出した消失円墳の周溝である。平成13年度の区画整理事業に伴い調査（42地点）した際にすでに確認しているが、今回の調査でもそれが確実に特定できたことは大きな成果である。また、時期的には、堂ヶ嶋第2遺跡と同時期の古墳と思われ、同遺跡から続く円墳群や地下式横穴墓群等の存在が想定されることから注目される遺構である。

D区：D区は、都萬神社の北側に位置した市道310号である。周辺には県教育委員会によって調査された上妻遺跡A区、西都市教育委員会によって調査した上妻遺跡Ⅰ地点が所在している。上妻遺跡A区からは豊後国の金剛宝戒寺と同范の単弁八葉蓮華文軒丸瓦、斜格子叩きの平瓦等が出土し、上妻遺跡Ⅰ地点からは地表下0.20m程に版築ではないかと思われ非常に硬い層を検出し、肥後系の複弁12葉蓮華文軒丸瓦が出土した。このことから、官衙か白鳳期の氏寺の存在が想定されており、注意して調査したが、残念ながら全体的にかなり削平を受けているようで、関連した遺構は検出することができなかつた。しかし、一括としてではあるが多くの古瓦が出土したこと、また、その古瓦がこれまで同様、格子目叩きが主体を成しており、寺崎遺跡（国指定史跡「日向國府跡」周辺）とは様相を異にしていること（縄目叩きが主体）が再認識されたことは大きな成果である。

F区：F区は、市道278号と279号、そして、袋小路となった私道であるが、1～7地点（市道279号）では全体的に削平されているよう、遺構はほとんど確認することはできなかつた。8～11地点（私道）ではアカホヤ火山灰層が遺存しており、柱穴や溝状遺構等を確認することができた。また、アカホヤ火山灰下層からある程度まとまって焼粧が出土したため、周辺には集石遺構が所在し、縄文時代早期の集落跡の存在が想定される。12～19地点（市道278号）では、アカホヤ火山灰層は遺存していないものの、縄文土器が多く出土した。縄文土器は早期の貝殻条痕文系土器や後期の黒色磨研磨土器、そして、晚期の深鉢形土器等で、本地点周辺は縄文時代から長期間に渡って生活が営まれていたことが判明した。

(文責 義方)



1. 1-7地点遺構検出状況



2. 1-7地点完掘状況（北から）



3. 1-7地点完掘状況（南から）



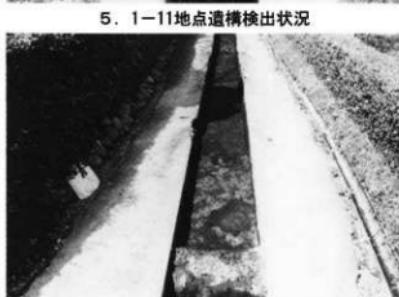
4. 1-7地点溝状遺構土層



5. 1-11地点遺構検出状況



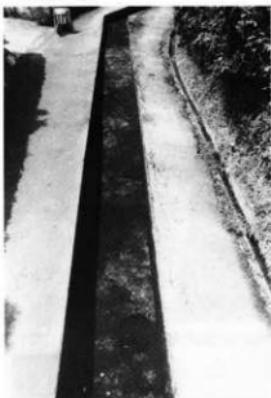
6. 1-11地点完掘状況



7. 2-2地点遺構検出状況



8. 2-2地点完掘状況



1. 2-3地点遺構検出状況



2. 2-3地点完掘状況



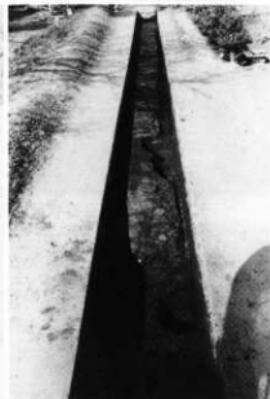
3. A-12地点完掘状況



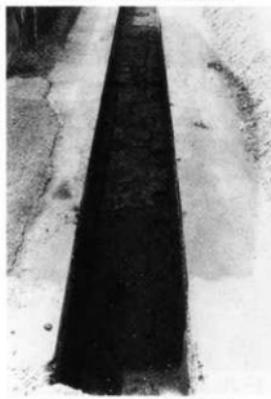
4. B-21地点完掘状況



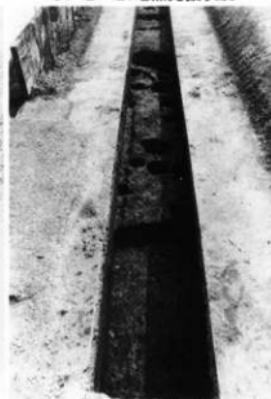
5. B-21地点完掘状況



6. B-22地点（南から）



7. B-23地点（北から）



8. B-23地点完掘状況（北から）



9. E-3地点溝状遺構



1. 1-16地点S A検出状況



2. 1-16地点遺物検出状況



3. 1-17地点遺構検出状況



4. 1-18地点遺構検出状況



5. 3-5地点遺溝検出状況



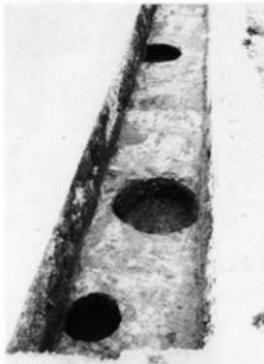
6. 3-24地点消失円墳周溝
掘削前状況



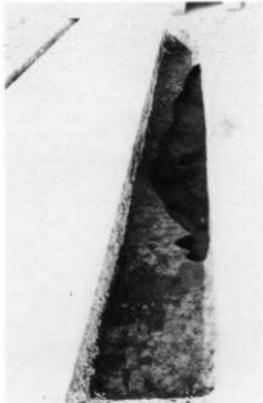
7. 3-24消失円墳周溝検出状況



8. 3-26地点消失円墳周溝検出状況



1. 3-27地点遺構検出状況



2. 3-32地点遺構検出状況



3. D-2地点遺構検出状況



4. F-1地点遺構検出状況



5. F-10地点遺物出土状況



6. F-10地点遺構・遺物検出状況



7. F-15地点遺構検出状況



8. F-18地点遺構検出状況

報告書抄録

ふりがな	どうがしま かみつま どうじまる いしづき				
書名	堂ヶ鶴遺跡、上妻遺跡、童子丸遺跡、石貫遺跡、				
副書名	妻北地区下水道敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ				
卷次	第3集				
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	第50集				
編著者名	蓑方政幾・津曲大祐				
編集機関	西都市教育委員会				
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111				
発行年月日	西暦 2007年3月20日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 遺跡番号	北 緯	東 緯	調査期間
どうがしまいせき 堂ヶ鶴遺跡 かみつまいせき 上妻遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあざみ村あがいしづき 大字三宅字石貫他	1016 1018 1021 1025	日本測地系 32° 07' 21" 7753 32° 06' 32" 9279 32° 07' 34" 2110 32° 06' 45" 3694	日本測地系 131° 23' 39" 4448 131° 24' 23" 8717 131° 23' 30" 9237 131° 24' 15" 3496	20060701 20070222
調査原因	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
妻北地区下水道敷設事業に伴う発掘調査	散布地、住居跡	弥生時代後期・古墳時代後期・奈良・平安	消失古墳周溝、竪穴住居跡、溝状遺構	土師器 須恵器 磁器 石器	
調査面積	確 認 調 査			本 発 掘 調 査	
				2331.4m ²	

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第50集

堂ヶ嶋遺跡・上妻遺跡

童子丸遺跡・石貫遺跡

平成19年3月20日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 吉永印刷
